「わたしたちは何を信じているか」 2022 年 5 月 1 日使徒信条説教①

詩編 89 編 1 節～17 節

【マスキール。エズラ人エタンの詩。】主の慈しみをとこしえにわたしは歌います。わたしの口は代々に あなたのまことを告げ知らせます。わたしは申します。「天にはとこしえに慈しみが備えられ あなたのまことがそこに立てられますように。」「わたしが選んだ者とわたしは契約を結び わたしの僕ダビデに誓った あなたの子孫をとこしえに立て あなたの王座を代々に備える、と。」〔セラ 主よ、天があなたの驚くべき力を告白し 聖なるものがその集会で あなたのまことを告白しますように。雲の上で、誰が主に並びえましょう 神々の子らの中で誰が主に比べられましょう。聖なるものの集いにおいて あなたは恐れられる神。御もとにあるものすべてに超えて 大いに畏れ敬われる方です。万軍の神、主よ 誰があなたのような威力を持つでしょう。主よ、あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは誇り高い海を支配し 波が高く起これば、それを静められます。

あなたはラハブを砕き、刺し殺し 御腕の力を振るって敵を散らされました。天はあなたのもの、地もあなたのもの。御自ら世界とそこに満ちるものの基を置き 北と南を創造されました。タボル山、ヘルモン山は 御名を喜び歌います。あなたは力強い業を成し遂げる腕を具え 御手の力を振るい 右の御手を高く上げられます。

正しい裁きは御座の基 慈しみとまことは御前に進みます。いかに幸いなことでしょう 勝利の叫びを知る民は。

主よ、御顔の光の中を彼らは歩きます。絶えず、御名によって喜び躍り 恵みの御業にあずかって奮い立ちます。

ローマの信徒への手紙 10 章 1 節～13 節兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。 わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。 なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。 キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために。モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています。 しかし、信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。では、何と言われているのだろうか。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。 口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。 「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

１，私たちは何を信じているか本日から、三要文の説教は使徒信条を学んでまいります。皆さんもご存じの通り 2016 年から始まりましたこの三要文全体の学びも、今年の 3 月で一巡しましたので、使徒信条に関しては、二回目の学びとなります。三要文の学びは、もう何度も伝えておりますが、奇数月の第一週と、第五週のある月の第五週と決めております。そういう頻度でありますから、しかも 11 月は召天者記念礼拝などがあってしませんから結局一年に８回くらいしかしません。前回の使徒信条の学びはおよそ３年で終わりました。洗礼と聖餐の意味についての説教も含めても 19 回。少々ざっくりとした学びであったと思います。長老の中にも、もっと一つ一つの言葉を丁寧に説教してほしいという要望がございましたので、二回目はもっとしっかりと、5 年くらいはかけて礼拝の御言葉として聞いていきたいと思うのです。使徒信条、十戒、主の祈りと、この三つの教会の要の文である三要文は古代よりキリスト教会の信仰を言い表す大切な言葉として理解されてきました。その中でも使徒信条は、私たちの教会の信仰を言い表す大切な基本となる信条であります。この使徒信条以外にも、ニカイヤ信条、アタナシウス信条と言われるものが基本信条として尊重されております。わたしたち日本基督教団の教会では、特にこの使徒信条を大切にしておりまして、日本キリスト教団信仰告白の中にも最後に使徒信条を告白します。これらの信条よりももっと長い教理問答書などがありますが、私たちの教会が大切にしておりますハイデルベルク信仰問答もまた、使徒信条、十戒、主の祈りについての項目が長く語られております。この使徒信条に代表される基本信条というものは、プロテスタント教会だけが告白しているのではありません。カトリック教会でも告白されております。そのように、基本信条において、カトリックとプロテスタントは一致できると思います。聖餐の理解などにおいては一致していないにしても、正しい信仰というところでは概ね一致できるのです。私たち改革長老派の教会は、プロテスタントの教会の中でも特に、正しい信仰に立つこと。正しい信仰とは何かということを大切にしてきた教派であります。本日の礼拝説教の題を「私たちは何を信じているか」といたしました。何を信じているかによって、わたしたちの人生は決定してしまうと言って良いかもしれません。神などいないと確信している人は、神様なしで生き、神様なしで死ぬことになりましょう。自分だけを信じているという人は、自分の力だけでやっていこうとするでしょう。信じているものに基づいてわたしたちは歩んでいく。私たちはキリスト教会が信じてきた信仰を、共に信じて生きていきます。それが人間の最高の道であり、真理であり、私たちを本当に生かすと確信しているからです。私たちが信じていることは私たちを生かすのです。少し大げさな言い方をすれば、わたしたちの人生、私たちの生死に関わることであります。

信仰生活とは、何かわたしたちの人生において多くの時間を占めるであろう仕事とか、趣味など、そういうものとは一線を画すものであります。仕事というのは、神様が与えてくださる召命という意味をもっていますから、まさにこの仕事をするために生まれてきたと言えるような、人生をかけることのできるものでありますけれども、それも、定年を迎えたらやめなければなりません。あるいは、人生には仕事よりも趣味に生きると言って、そういう自分の好きなことに自分の財産をささげるような人もいますけれども、そういう生きがいと言えるものも体が悪くなったりしたらできなくなることがあります。わたしたちがキリスト教会につながり、教会の信仰に生きる。教会生活を送るということは、もっと深い実存をかけているものであります。たとえ定年になって仕事を終えても、趣味などができないほどに体が弱っても、病気などになって、人生の生きがいがなくなったと思うようなそのような中でもなお私たちの心に光り続ける希望の灯火であります。だからわたしたちは、その与えられた信仰を決して最後まで、その息の絶える日まで捨てることはありません。家族は、どんなに大切な夫や妻、親や、息子や娘であってもいつか死に別れることがあります。しかし神様を信じるということは、死を越えて共にいてくださるキリストの愛を知り、そのキリストの命の中で、人生を全うし、キリストの命の中で安心して死に赴くことであります。この主イエス・キリストの命に与る人生。キリストを知り、キリストを確信すること。それこそが私たちの、どんなときにも消えることのない慰めであり、喜びなのです。

２，信仰による義さて、そこで今日与えられました御言葉はローマの信徒への手紙の第 10 章、1 節から 13 節であります。まず、

6 節からの御言葉に注目したいのです。「しかし、信仰による義については、こう述べられています。」聖書では、神の義とか、信仰によって義とされる、という言葉が出てまいります。わたしたちが救われるためには、どうすれば良いか。命を得るためにはどうすれば良いか。旧約聖書の時代の人々は、皆、神様の掟を守って、神様の正しさにふさわしい生き方をすることによって救われると信じていたのですね。しかし、主イエスが、ただ私を信じなさい。わたしがあなたのために、死んで、復活した。だからあなたはこの恵みを受け入れたらもう救われるのだ、と言ったら、そんなうまい話あるわけないでしょう、と思ってしまう。あまりに簡単すぎて、逆に信じられない、ということがあると思うのですね。

旧約聖書の列王記下の第 5 章にナアマンという、アラムの将軍が登場します。武勲を立てていたので、王様からは重んじられていましたが、重い皮膚病を患っていました。それがナアマンの最大の悩みでした。そのナアマンに、イスラエルの少女が捕虜として連れて来られて、ナアマンの妻の召使いになっていたのです。その少女がナアマンの妻に語りました。サマリアの預言者のところに行けば必ず癒してもらえるでしょう、と。その言葉にすがって、アラムの王に、その預言者に会ってぜひ自分の皮膚の病気を癒しに行っても良いかと尋ね、その後色々あるのですが、そのことを預言者のエリシャが聞きつけて、その男をわたしのところによこしてくださいと言います。ナアマンは、喜んで、預言者エリシャのところに向かいますが、ナアマンは、途中で使いを送ってナアマンにこう告げます。「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」その言葉を聞いたナアマンは腹を立てるのです。預言者エリシャがもっと体の幹部に手を当てて、色々と祈祷したりして、癒してくれるものと思ったので、この、ヨルダン川に行って七度身を洗いなさいという言葉は、あまりにも簡単で、信じられなかったのでしょう。馬鹿にされていると思ったナアマンは怒りました。しかしそのとき、家来たちがナアマンを諫めるのです。「あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそのとおりなさったに違いありません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」この家来たちの言葉に、それもそうか、と納得したナアマンは半信半疑でヨルダン川で七度身を洗う。するとナアマンの皮膚は清くなり、皮膚病は癒されたという。そのような物語が記されています。この物語は、いわば「信仰による義」を表していると思うのです。ナアマンはきっと非常に根性のある強い人であったでしょうから、どんなに苦しい修行であっても、その病気が癒されるために耐え抜いたと思うのですね。毎日血が出るまで乾布摩擦しなさい、とか。人参を一日３０本食べなさいとか、それぐらい無茶なことを預言者が言うならば、むしろ喜んで従ったかもしれない。しかしただ、ヨルダン川で身を洗うだけで癒される、それだけでよし、と言われたら、逆に、そんなことあるわけないだろう、と思ってしまうのです。恵みがあまりに大きすぎて、理解できない。永遠の命という途方もない価値のものを、いわば無償で与えると言ってくださっているのですから。それが神様の恵みの大きさであるだろうと思うのです。この世の中の人々は、大学に入るのも、地位や名誉を手に入れるためにも相当の努力と時間が必要だということを経験で知っておりますから、「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる」、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」などと言われると、甘い話だと思う人もいるのかもしれません。むしろ、神様の掟に一所懸命に従った人間のほうが救われるだろう。血がにじむような努力をしなければ、天国の門は開かれないだろう、と思う。イスラエルの人々はそこから離れられなかったのですね。しかしそうではない。私たち罪人のために、主イエスが罪を十字架で被ってくださり、死んでくださった。よみがえってくださったのだから、わたしたちはただそれを信じるだけで救われる。これが福音です。しかしその福音の恵みを、本当に自分のものにしたいと願うなら、わたしたちはナアマンがエリシャの言葉を信じてヨルダン川に行って身を洗ったように、それができるのだから、しなければならない。それが、信仰告白ということであります。信仰とは、神様を信頼することです。信頼するとは人格的な関係です。それは神様が信頼に足る方であり、呼べば答えてくださる方であるということを信じる。むしろ神様が私たちをすでに福音の世界を開いていつも招いてくださっているのだから、そこに今わたしたちが応えるのです。むしろわたしたちが応えるのを主イエスは待ってくださっているのです。神様を確信と喜びをもって信頼するために、何を信じているのか。何が、本当に私たちにとって喜びであるのか。私たちは、聖書の福音のエッセンスともいえる使徒信条を学んでいくのです。

３，神を小さくしてはならないここでパウロは語ります。「心の中で、『だれが天に上るか』と言ってはならない。これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。また、『だれが底なしの淵にくだるか』と言ってもならない。これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。」これは未信者に対して語っていたのではなく教会の人々に語っていた言葉であったようです。主イエスが天に上ったというが、そんなこと、本当にできるのだろうか。底なしの淵。つまり陰府に主イエスが降りてくださったと言うが本当だろうか。……そんなことを言う人々がローマ教会にもいたのかもしれない。自分の常識で判断すると、そんなことはあり得ないというわけです。しかし信仰とは、自分の常識から出ることでもあります。奇跡とか、不思議なことが聖書に書いておりますが、それゆえに信じられないという人、それが躓きで信仰を告白できないという人は案外と少ないと思います。しかし、主イエスが死んで、陰府にくだられたということ。天に昇られたということを信じるのが難しいという人は、それはまだ自分のこととして受け止め切れていないからであるかもしれません。神様は全能です。だからわたしたちの常識を超えて何でもおできになる方であります。その神様の全能を、偉大さを。不思議さを、理解できないからということで。科学的に証明できないということで否定することは神様を自分たちの常識の中で小さく小さくまとめてしまうということです。自分の小さな常識の中には救いなどはないのに、神様をその中にまとめてしまっても救われるわけがありません。わたしたちには神様について、わからないことが沢山ある。でも、神様はこの世界をお造りになった、命をお造りになり、時間と永遠を支配しておられる偉大な神様なのだから、その神様が主イエスを陰府に降らせたり、天に昇らせたり、そのようなことをできないなどと決めてしまうことはおかしいことなのです。まして、主イエスは私のために、死んでくださったのです。主イエスは、あなたのために、陰府に降ってくださったのです。陰府をもサタンの支配から神の支配に置くためです。そこに堕ちて行く人間をも救い取るためであります。主イエスが復活された体のままで天に昇られたのは、わたしたちもその体が復活し、天に昇るためです。そのように全ては人間の救いのためであります。ですから主イエスのなさったことを私のこととして受けて行くとき、それはわたしたちにとって喜びとなります。わたしが滅びないために主イエスはわたしの罪を担ってくださったのだ！代わりに、陰府に降ってくださったのだ！わたしが天に昇るために、主イエスが先に天に昇ってくださったのだ！このことを告白するように皆さんは招かれているのです。

４，死を越える希望がある

11 節には、こう語られます。「聖書にも、『主を信じる者は、だれも失望することがない』と書いてあります。ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。」どんな時にも失望しない。この教会にも多くの信仰の先達がおります。すでに天に召されていった人々であります。そして彼らは皆、失望することなく天に召された。神様なんていないと言って文句を言って死んで行った人など一人もいません。そういう生き方、死に方ができるのだということであります。一昨年亡くなられた H さんなどは、最後、私はコロナ禍のゆえに病床に伴うことができませんでしたが、癌の末期の状況の中でも、はっきりと死を自覚しながら、意識を失う寸前まで、神の国に入りたい、入りたいと願っておられたと伺いました。希望をもって死に向かわれたのです。もちろん痛みもあったでしょうし、怖かったと思います。しかし失望はしなかったのです。主イエスの霊が H さんをその最後まで確かに支えてくださっていたからです。そういう、死という最後の苦難をも打ち破る希望が確かに今、私たちに与えられている。救われている。私たちは、この信仰を自分ひとりで信じているのではありません。みんなで信じているのです。わたしたちの信仰。教会の信仰であります。その中にこのわたしがつながっている。ときにわたしたちの信仰は弱くなります。今日、確信を与えられたと思っていても、明日には不安になって、何か心許なくなっているかもしれません。それぐらいにわたしたちは弱い存在であります。しかしわたしたちの信仰の根拠はわたしにあるのではありません。天の神がわたしたちを支えてくださっている。教会を支えてくださっている。その教会の二千年の歴史に支えられ、主の御もとにある多くの聖徒たちにも支えられ、その人々の信仰に連なって神の御国を目指しているのです。わたしたちが今まで、信仰を長く保ち続けているのは、天において主イエスが祈り続けてくださっているからであります。日々、聖霊をそそぎ、新しく信仰を与えてくださっているからであります。その恵みの中で私たちは毎週、御言葉によって新たな信仰を与えられ、心を新しくされていくのです。この礼拝の中で私たちは毎週使徒信条を告白いたします。その信仰告白を通して、わたしたちは主イエスが私たちの人生の主であるということ。その主イエスがわたしのために、わたしたちのために、本当に死者の中から復活してくださった。だからわたしたちも死を怖れずに歩むことができる。主イエスがわたしたちの人生に責任を持ってくださっている。そのようなその人生の最後まで私たちと伴って下さり、導いてくださっている。その喜びを確認していくために何度でも、使徒信条を学び、告白していきたいと思います。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。本日より、使徒信条を学んでまいります。この信条に告白されております一つ一つの言葉をわたしたちの喜びとして受け止めて行くことができますように。私たちが使徒信条を私たちの信仰として唱え、そこにある喜びを共に分かち合っていくとき、この礼拝の中で新しい信仰が生まれますように。新たにこの信仰を告白し、洗礼を通してこの諏訪教会に連なる人々が与えられていきますように。私たちの内に信仰を興してくださるのは主よ、あなたであります。しかし、そのために伝道の業をわたしたちは担っております。正しく、確かなかたちで御言葉が語られていきますように。そこに聖霊が豊かに臨んでくださいますように。伝道の業が祝福されますようにと心から願います。今週の私たちの歩みを豊かに導いてくださいますように。今日、この御堂に集うことのできない兄弟姉妹の上に。そして施設におられる兄弟姉妹や、体に痛みや苦しみをもっておられる兄弟姉妹の上にも主の慰めと癒しが豊かにありますように。ウクライナとロシアの戦争をどうか終結させてくださいますように。核戦争に至ることのありませんように。為政者の上にあなたの御支配がありますように。コロナ禍も 3 年目です。どうか今年で終わりますように。言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン